校長室からこんにちは！

Ｎｏ．１０
令和３年９月３日
発 行：貝塚 敦

や	やるぞ～	ま	まけないぞ～	が	がんばろうぜ～	た	楽しい学校になるように

Good Try！ Good Job！！

スポーツを自分でやるのも観るのも大好きである。小中学校では、王・長島時代のプロ野球、北の海・輪島時代の大相撲、沢村忠のキックボクシング等々に熱狂した。テレビが最大の娯楽の時代だった。

その当時はマイナーなサッカーだったが、東京テレビの「三菱ダイヤモンドサッカー」は秀逸だった。ヨーロッパや中南米のクラブチームの試合が土曜の６時に放映されていて、テレビにかじりつくように観た。元日本サッカー協会理事長（東大出身のメキシコオリンピックコーチ）岡野俊一郎と金子アナウンサーによる解説は、サッカーへの造詣の深さと軽快な口調による絶妙のやり取りで、スポーツ中継解説史上、最高の名コンビだと確信している。テレビを通してとはいえ、現役のジーコや皇帝ベッケンバウアー他往年のスーパースターであるレジェンドや、海外日本人プレーヤー第１号奥寺康彦の生のプレーに触れられたのは何とも幸せだった。

高校２年の時、担任の先生が全日本剣道選手権の県代表で出場したので、日本武道館に応援に行った。恩師の相手は過去に日本一の実績をもつ国士舘大出身の強豪で、試合は完敗だった。先輩を応援する相手サイドの大学生集団の燐とした姿が印象的だった。早々に敗れたので、旧国立競技場にラグビー早明戦を見に行った。折しも大学ラグビー全盛期。日本最大のスタジアムは通路まで立錐の余地なく、６万超の観客に圧倒された。

大学生の時、同じく旧国立競技場にワールドカップアジア予選の日本対韓国戦を観に行った。未だＪリーグ発足前。実業団のサッカーリーグの試合ともなれば閑古鳥の鳴く有様。その試合も国際試合というのに会場の半数にも満たない観客の中、力の差も歴然で０対２の完敗だった。雨がしとしと降る中、肩を落としながら競技場を後にする。「また今回もだめだったな」。道すがら、友人と交わした唯一の言葉だった。

そんな思い出を振り返ると、特に今日の日本サッカーの隆盛は真に隔世の感。何が変化したのか。それは、「普及」と「強化」の歯車がうまく機能したためである。「普及」とはすそ野を広げること。「強化」をはトップレベルを育てること。「強化」は、もちろんＪリーグの発足に尽きる。しかし、それだけではでここまでたどり着けなかっただろうし、これからも長続きはしないだろう。サッカー人気がどん底の頃にも、学校や地域や実業団でコツコツとサッカーに取り組んでいた選手や指導者、手弁当で指導していた町のサッカーチームのコーチなどがいたことを決して忘れてはならないだろう。大いなる「普及」への土台が脈々と生き継いでいた。

★　★　★　★　★　★　★　★　★　★　★　★　★　★　★　★

そんなスポーツ好きの自分なのに、今回の東京オリンピックは、１００％晴れ晴れとした気持ちで受け止めることはできなかった。このコロナ禍なのに強行されたオリンピックだからと言うだけではない。

最大の違和感は、メダルを獲得した選手だけがちやほやされ、銅メダルよりも銀メダル、銀メダルよりも金メダルを獲った者がもてはやされる風潮。国別のメダル獲得数を誇張し、人気競技偏重のマスコミのあり様。

確かに、選手のメダル獲得への努力は大いに賞賛されるべきあり、選手の活躍や超人離れしたプレーや技術には感動するばかりだ。だが、だからといって頑張ってきたのはメダル獲得者だけではないはずなのに・・・・・・・。

そして、私はこう思うのです・・・・・・・・・・・・・・・

学校も、あと１ヶ月で折り返し地点です。子どもたちの前半戦の取組を評価する時期を迎えます。競争社会の評価は、もちろん結果がすべての「相対評価」の極致。

しかし、言うまでもなく私たちの子どもに対する評価は「絶対評価」です。その子のすばらしい点や進歩の状況等を、積極的かつ正当に評価してあげてほしいものです。

また、義務教育段階の一公立校である山潟中学校は、何はともあれ「強化」よりも「普及」がメインの学校です。メジャーリーグの大谷、サッカーの久保や東大生を生み出すことを最優先にめざしているわけではありません。しかし、子どもが夢を抱ける素地に向けた指導、授業づくり、学校づくりは決して放棄してはならないはずです。

アメリカ合衆国がスポーツ大国であり続けるのは、人種的な体格や身体能力の優越が根本にあるのはもちろんですが、たとえ失敗を繰り返しても、「*Good Try* 」「*Good Job*」と常に子どもを励まし伸ばすカルチャーが、国全体に根付いているからだと思います。

私たちも、どんな生徒にも金メダルを与えられる、そんな教師でありたいものです。